

総合教育会議 会議録

会議の名称	令和4年度第1回山口市総合教育会議
開催日時	令和4年11月24日(木) 10時～11時40分
開催場所	山口総合支所 白石小学校
公開・部分公開の区分	公開
出席者	<p>山口市長 伊藤 和貴</p> <p>山口市教育委員会</p> <p>教育長 藤本 孝治</p> <p>委員 山本 晃久</p> <p>委員 佐々木 司</p> <p>委員 横山 洋之</p> <p>委員 佐藤 真澄</p> <p>委員 角川 早苗</p> <p>委員 鮎川 友子</p>
事務局	<p>総合政策部長 中川 孝、総合政策部次長 藤井 正治</p> <p>企画経営課長 宮原 尚規</p> <p>教育部長 兒玉 直也</p> <p>教育総務課長 石川 暁男、教育施設管理課長 藤原 茂</p> <p>学校教育課長 右田 俊博、社会教育課長 内田 英司</p>
次第等	<p>【次第】</p> <p>1 会議</p> <p>(1) 市長挨拶</p> <p>(2) 会議</p> <p>・意見交換</p> <p>① ICT教育</p> <p>② 小中一貫教育</p>

内容	<p>1 会議開会 10時 開会</p> <p>○児玉教育部長 それでは、ただ今より、令和3年度第1回山口市総合教育会議の会議を開催いたします。いたします。</p> <p>私は、この会議の進行を務めさせていただきます、教育部長の児玉です。よろしくお願いいたします。</p> <p>それでは、最初に、本会議の主催者でございます伊藤市長が、御挨拶を申し上げます。</p> <p>(1) 市長挨拶</p> <p>○伊藤市長 それでは、総合教育会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。</p> <p>(2) 議事</p> <p>○児玉教育部長 それでは、意見交換に移らせていただきます。</p> <p>この度は、テーマを2つ用意しております、1つは「ICT教育」、もう1つは「小中一貫教育」でございます。</p> <p>まずは1つめのテーマであります「ICT教育」について、伊藤校長に、白石小学校の状況、特にICTを活用した授業づくりなどについてお話いただきたいと思っております。</p> <p>その後、会議に先立ち行いました授業視察や校長先生の説明を踏まえ、皆さんでディスカッションしていただきます。</p> <p>それでは、伊藤校長、お願いします。</p> <p>○伊藤校長 ～ICTを活用した授業づくり等の説明～</p> <p>○児玉教育部長 ありがとうございました。それでは、これより意見交換に移ります。時間は約15分を予定しております。よろしくお願いいたします。</p> <p>○山本委員 今日、大変いいものを見せていただきまして、ありがとうございました。</p> <p>一つ質問なのですが、教員が多くなればなるほど、教員側の能力の差というのが生まれると思うのですが、今、ICTを使う能力に差はありますか。</p> <p>○伊藤校長 やはり差はあります。</p>
----	--

しかしながら、教室で子どもたちと使う程度はどの教員もできるようになっています。これはやはり、使わないと身につかないなというところがありますので、棚に入れっぱなしの学級がないように時々臨時研修などを行っているところです。

○横山委員

今クラス内には20人から30人くらいいると思うのですが、その子どもたちの授業中の画面を先生たちは見ることはできるのですか。

どこかの学校では、各クロームブックの画面を大きな画面に分割して出していたところがあったと思うのですが、先生が一人ひとりをコントロールできるのかなと疑問に思いました。

○伊藤校長

そういうやり方もできるというふうに聞いています。

本日見ていただいたところは、授業中に自由検索をしていたと思います。そうした場合には教員が一括して管理することが出来なかったと思います。

そうした場合、教員がどこにいるかというのが非常に重要になってくるのだらうと思っています。

子どもたちが自由に検索するときには、子どもたちの間、机の間を歩いて、確認するというのはどの学習も重要なことですので、今委員さんがおっしゃったように、余計なものを見ているという場合がないようにしなくてはと思っています。

○右田学校教育課長

全体の画面で、全ての端末の画面を把握することはできるようになっています。

2学期から、このようなソフトを入れました。

子どもたちと安心しながら、学べる環境を作っております。

○佐藤委員

途中、「くまモン」のところで著作権という言葉が出てきました。

私たちが子供のころにはなかったことです。

今の高校生や大学生にネットリテラシーの教育の必要性が盛んに言われているのですが、ICTの技術はもちろん進んでいくなかで、一般常識を学ぶと同じようにネットリテラシーを学ばなければならないのだなと感じました。

本論とは異なりますが、2つの校舎で明るさが違ったような気がします。電子黒板を見ようと思うと、暗くした方が見やすい、タブレットも見やすいと思うのですが、子どもたちの手元の照度の関係によって、子どもたちの目への影響ということも気になりました。

○伊藤校長

照度については、太陽の角度、季節によっても全く違います。

ですから、実際、調べ学習をするときに、本の明るさに教室の明るさを合わせますので見えにくいなと思っています。

ただ、電子黒板の一番のメリットは、動かせるということですので、角度を変えることによって対応しております。今までパソコン教室にあるパソコンでは、それができませんでした。

それ以外には、姿勢であったり、目の事であったりという、健康教育を一方で進めていく必要性を感じています。

○角川委員

ICTには良いことたくさんあると思うのですが、課題もあるのではと感じていることがあります。

例えば野菜の勉強する際、昔だったら、その形などを頭で記憶していなければいけなかったところを、今は端末を使用し、野菜を撮ってしまえば簡単に調べることができます。

頭で記憶する、目を見た者を頭にインプットするというをしなくてよくなることによる影響はないのか、今後、子どもたちの何か失われるようなことはないのかを気を付けていなければならないと思っています。

また、端末を使用することによって子どもの意見を集約することが簡易になるといった便利な点がある一方で、相手に伝えようとするときの表情などの表現する力といったコミュニケーション能力が育まれないといったことがないのか懸念しています。

そうしたICTを活用することによるマイナスな部分についてもフォローしながら進めていただきたいなと思いました。

○伊藤市長

私も今の意見に同感です。

端末を使用し昼休み外で遊ぶ内容をネットで投票する事例がありました。

匿名によるアンケートとなるため、発言力の強い子の影響がそこで緩和されるといった話があったのですが、ある意味では、切磋琢磨というか、人間力が鍛えられる部分もあると思うので、そのあたりのバランスのとり方、リアルな教育かネットの教育、その辺の腕の見せ所がこれから大事になるのだろうなという印象を持ちました。

○藤本教育長

これから令和の日本型学校教育というのが、個別最適な学びと協働的な学びというのがキーワードになっているなかで、今日、そういったことをふまえた授業が行われていたと思っております。

多くの学級で端末や電子黒板を使い、豊かな学びの一つのツールになって使われていたなというのを感じました。

最近、学校訪問をしているなかで、多くの学校で、ICT機器を活用した授業が増えてきておりまして、機器の使い方も、バリエーションが広がってきているのを感じております。

ではいつもICTを使えばいいのかというのではなくて、やはり単元の中のどこで活用するのか、先ほどの対応力とか、書く力とか、それは当然必要なことであって、すべて、ICTに頼ればいいのかということではなく、その辺のベストミックスを今から各学校でしっかり取り組んでいく必要があると感じております。

○児玉教育部長

それでは、まだご意見やご感想もあるかと思いますが、次のテーマに移らせていただきます。

それでは、続いてのテーマは小中一貫教育です。

○藤井学校教育課主幹

～小中一貫教育の説明～

○児玉教育部長

ありがとうございました。

それでは意見交換に移らせていただきます。

どなたか、ご発言をお願いいたします。

○鮎川委員

ただ今の説明を伺い、よく分かりましたし、これから山口市の教育で、どういう方向を目指していけばいいか、何をすればいいかというのが、具体的によく分かったなと感じております。

一貫教育には、内容面で二面あるのかなということを気が付きました。

1つは学校の独自性によるそれぞれの取り組み、もう1つは全ての小中学校における共通して取り組むべきことです。

その中には小学校の文化、中学校の文化という、それぞれの学校の先生にとっては当たり前のことが、違う学校の先生から見たら違うところもあるのではないかと感じております。

先ほど、情報共有をされるとか、あるいは全市でという説明がありましたので、ある程度のラインを市全体で備えていくこと、そしてまた地域性とか、校種によって、独自性を出していくという、そういうところを、これから期待をしていきたいと思っております。

○山本委員

平成28年に、この小中一貫教育について文部科学省が手引きを出しております。

その手引きの中は1章から10章までありますが、その中の9章に、特に特別支援教育の充実という項目が特化してあります。だから、小中一貫を考えるときには外してはならない部分だと思いますので、よろしく申し上げます。

○佐々木委員

小中一貫というものを進めていく際に、それが縦軸だとしたら、もう一つ横軸というか、山口市独自の軸があるといいなという気がしております。

全国的にも県内他市町も、かなり小中一貫は進めているようです。そうした中で、山口市は一味違うなという、ステップアップ、ジャンプアップしていく際の、横軸というものが欲しいなと思います。

それが何になるだろうかを考えると、児童生徒の主体的な参画という「主体性」かなと、ウェルビーイングのこともありました。この主体性というのは、社会を変えていく主体といますか、単なる一般的な主体性よりも、自分たちでクラスとか世の中とか学校とか地域以外を変えられるのだという意味を含めた「エージェンシー」、主体性です。

そう考えたときに、先ほども例えば指導案とか、研究授業の事もスライドの中に取りましたが、子どもたちが授業のデザイン、研究授業のデザイン段階から、あるいは指導案作成から子どもたちが作成、参画していくとか、それから授業は受けるのですが、これまでは研究授業のある意味受講者として、受け手として、その教室にいるということなのですが、その授業の後の検討会といますか、その場にも児童生徒が参画する。

授業を受けているときには、ある意味、客体ですが、主体的に客体として参画し、授業を受ける。

つまり、計画にも参画し、実際の授業も受け、その後の検討会にも参加するというようなスタイルを小中で一貫して作っていくことをすれば、これは全国的にも、かなり注目をされる案になると思います。子どもたちの主体性も高まるのではないかなというように思っております。

○山本委員

山口市が他地域とどこがどう違うのかなという目で、今の発表を見たときに、違うのは、一つ「本物の学力」ですね。

その本物の学力というのを読み解いていくと、自己肯定感などの発揚などの非認知能力なのです。

だから、これを前面に押し出していくということが、今、委員が言ったことにつながってくるのかなとも思います。横軸をそういったあたりに持ってくれば、山口市としての独自の教育が進められてくるのかなということを思いました。

○佐々木委員

今、授業でのICTが使われていると思うのですが、それをを用いて、例えば先輩の去年のデータ等を見て、それを反転学習として用い、また蓄積して使って活用するとか、あるいはそれをベースに今度は地域の方々に自ら自分たちの学習を発表して伝えていくとか、使う範囲を拡大していくとか、というようなことも、使い方としては、あるだろうと思います。

それから地域コミュニティの考え方ですが、住んでいるコミュニティ、これは非常に

大事ですし、山口市全体を愛することも大事です。

一方で、セカンドコミュニティと言いますか、住んでいないけど、もう一つ二つくらい、2つ目の地域に出向いて、自分たちの地域をプレゼンテーションするとか、同時にその地域の、学校の良さを学ぶとかというようなことも、やってやれなくはないかなと思います。

どちらかという、住んでいる地域で、コミュニティを維持するということは一生懸命やるわけですが、コミュニティビルディングと言いますか、それを新たに住んでいなくてもやっていくという、住んでいなくても、あるいは縁もゆかりがそもそもなくても、ある意味、心として、気持ちとして、サポートしていくみたいなの、そういうような動きがICTとか小中一貫と絡んでできる方法は無いだろうかみたいなことを思っております。

○角川委員

先ほどの「本物の学力」というところで、山口市が目指すところ、その他者と関わる力、協働する力、学ぶ意欲、自己肯定感、そういうものは、小学校1年生から始まるわけではなく、幼保からすでに大事なことではないかなと思っています。

私は自分の子どもたちを私立に入れてしまったのですが、教育委員をさせてもらって、幼稚園、公立の幼稚園を回らせてもらって感じたのが、先生方が、教育として、本物の学力を身に付けさせるような子どもの自己肯定感や、他者と関わる力、表現力、そういうものをすごく大事にされているなということが分かりました。

それで、私立幼稚園に通ってみて思うのは、先生方が、子どもたちに静かに座らせて、それを教えるというか、そういう教え方と、公立幼稚園の教育の仕方は全く違って、公立幼稚園というのは本当にそのまま小学校、中学校と同じ指導を、連携されているのだなということ、すごく強く思ったので、ぜひ小中一貫なのですが、幼保も入れて、その幼保小中一貫でやれたらいいかなと思っています。

保護者が幼稚園や保育園を選ぶ際に、給食や、預かり保育、距離など、そういうことで選びがちです。幼稚園はそこまで重要に思っていないけど、実はすごく大事なかなと思っていて、公立幼稚園の良さ、こうやって小学校にそのまま上がる、特に仁保幼稚園とか、宮野幼稚園とか、本当に隣接されていて、幼とか小に上がるその連携、すごく出来やすいところだなと思うので、もっと公立幼稚園の良さが保護者の方に伝わるといいなというふうに思ったので、小中一貫の中にそのことも入れてもらえると良いと思いました。

○伊藤市長

そうですね、佐々木委員さんが言われた、いわゆるコミュニティビルディングの話。

私が強く思っているのは、やっぱり山口で生まれ育った子どもたちに山口のことを愛して欲しいということです。山口を愛する力というのはどこで育まれるか、昔だったら、子ども会活動とか、ボーイスカウト活動、ガールスカウト活動とか、そういった所でそういう資質が育ってきたというのがあるのですが、そういう社会教育活動がどんどん衰

退していています。現在、そうしたことを実現できるのは、やっぱり学校、あるいは地域協育ネット、そういった学校を取り巻く人々がある意味で地域を支える、子どもにふるさとのシャワーを浴びせる、そういうパワーの源になっていらっしゃる方からそうなのだろうと。たぶん幼稚園とかそうなのですね。お祭りに参加したり、地域の行事に参加したり、そういった意味で、子どもたちにふるさとのシャワーを浴びせて、その子どもたちが将来、山口に住みたいと思うような、そういう教育の実践というのは、非常に重要なのかなと感じています。

ある意味、昔の防長教育というのですか、明治維新のころの、それに近いものがあったのではないかなという気がしていますので、ぜひ、本物の学力の中に、地域の愛すること、あるいは伝統芸能等も含めて、そういった視点の中に入れてもらおうという気がしています。

今、市政は都市部と農山村の共存共栄、全部が良くなれないといけないという感じなので、そういった意味からすれば、都市部と中山間の子どもたちの交流とか、そういった1つのムーブメントも意味があるのかなと思ったりしています。

○横山委員

今、小郡中学校の生徒会において、自分たちで地区の問題点を話し合うということをやられています。その中で出てきた考えを家庭にも持ち帰り、保護者も協力して地域と一緒に連携していくという形にもっていけば、それなりに活動される方は少なくとも何人かは出てこれると思います。

○佐藤委員

私も角川委員と同じく、幼保小の連携にとっても興味があります。

特に最初に市長が話されましたが、保と幼って管轄も違います。それは、親、家庭の事情によって変わるだけであって、その時に家庭の事情によって受けられる幼児教育が違うということが、そこでもう不公平が生じているのではないかと感じたりしています。

では認定こども園になったらいいのかと言ったら、やっぱり認定こども園にいる子どもたちが本当に預かりの時間にどれだけの教育が受けられているのかというところもありますし、預かりとは違う幼児教育というものをどうやって保育、小、幼稚園が一体化していくのか、また、どのように小学校につなげていくのかなというところを考えられるといいのだろうなと思っています。

じゃあどうしたらいいかは分かりませんが、そんなふうに思ったりしています。

○鮎川委員

子どもたちは1日のうち、約8時間は学校で過ごしているわけです。

学校の影響は大きいと感じています。

この小中一貫教育という理由の一つの中に、小1プロブレムだとか、中1ギャップということもありますが、最初から、小中一貫教育ありきではなくて、子どもたちの視線

に立ったカリキュラムであるとか、色々な取り組みとか、そうしたところを外してはいけないと感じております。

○藤本教育長

いろいろありがとうございました。

今から本市ではコミュニティスクールを基盤とした小中一貫を教育改革の柱として進めていきたいと考えております。

私は学校の最上位の目的を「ウェルビーイング」、つまり子どもの幸せではないかなと常に思っております。そのためには、子どもたちが自立していく力とか、対話をする力とか、先ほど言われた地域愛、そういったものをしっかり醸成する、そういった資質、能力を育てていくことが必要かなと思っております。

本市は今まで、コミュニティスクールを核とした教育改革を進めてきました。

市長は、子どもが小さいうちに、地域の人たちからの温かい言葉といったぬくもりのシャワーを浴びさせることが大事だよということを常に言っておられ、そういった取り組みはコミュニティスクールを通して広がってきたように感じています。

最近、学校運営協議会等において子どもたちが熟議に参画してきており、学校の課題や地域の課題について当事者意識をもって真剣に考える子どもが増えてきており、徐々に成熟していると思っております。

一方で、子どもたち一人ひとりに目を向けると、学びにつまずきのある子どももおり、課題も山積しております。そういった中で、やはり小中学校で途切れることがない、地域全体での支援が必要不可欠だと思っておりますし、また本物の学力を育むための根幹ともなる魅力ある授業づくりを進めることによって、子どもたちが今日も学びたい、学校に行きたいとしてまいりたい、そして、不登校の課題解決につながっていくのかなと思っております。

また「幼保小中のつながり」。市長から幼保等のつながりも大事だというお話をいただく中で、私も大事であると感じております。

今回、いくつかの中学校区で、幼保小中のつながりを踏まえた小中一貫教育ということを実践して研究してみようということもあり、それを今から大きく波及して行って、それを山口全体に広げることができたらなという思いも持っています。

○鮎川委員

I C T教育について、先程、1年生は基本的なところの操作を学び、2年生ではというふうに、段階的に学習することを示していただきました。

確かにそういう子どもの発達段階による学びも必要であると思うのですが、学年ごとに目安というか、ある程度の共通性といったものはありますか。

また担任による独自性など、こうした授業をやってみたい、こんなことをしたらどうかというふうなことがおありではないかなと思うのですが、共通性と独自性の兼ね合いについて、ちょっと教えていただけますでしょうか。

○伊藤校長

学年での共通性など、そうした計画がきちんとあるわけではありません。

今までなかったものを学習の有効なツールとしてどういうふうに活用できるかなという検索をしているのが正直なところですよ。そうした中でも、1年生、2年生、3年生になってローマ字に出会うという学習指導要領上の教育課程がありますから、そうしたことを踏まえ、やっていきたいなと思っています。

先ほどの小中一貫の兼ね合いでいきますと、中学校3年生までどう縦のつながりを持っていくのか、どんな場面で生かせるのかというのがあります。

そうしたことと教員のスキルが常に一致しているわけではないので、この悩みは、校長としては、担任配置という面で非常に大きなものがあります。

最低限、これだけできるようにしていこうというのは、一方で教職員のスキルとして、大学でも学んだことがない情報教育のスキルを学んでいかななくてはならないわけですから、難しさがあります。

しかしながら、子どもたちに負けてはおられませんので、丁寧にやっていきたいと思っています。

まず小学校で大事にしたいのは、今の幼保小の1年生、2年生の心の部分、学習意欲の部分だと思っています。学校って、毎日ちょっと忙しいし、我慢しないとイケないこともあるけど、明日も来たいと思う学校にしたいなと思っています。それは山口市教育委員会で言われる本物の学力という部分をつけていかないとそれはつながらないと思うし、やらないとイケないことはいっぱいあるなと思います。

○角川委員

机が狭いとか、狭いゆえに端末を落としてしまうといった相談はありませんか。

○伊藤校長

従来の机の規格は、クロームブックを置くという考えはないことから、狭いです。それはランドセルもそうです。

○角川委員

以前、天板拡張君というグッズを見ました。

ふちが上がっており落ちないし、机が広くなるというものです。

これからの時代、クロームブックも教科書もノートも置いてとなると、机が狭いので、そうしたグッズは素晴らしいと思っていました。

机が広くなると教室が狭くなってしまうので、やっぱり大規模校では、すべての机にそうしたグッズをつけるのは基本的に難しいとは思いますが、何かしらの対応が必要になってくるのでしょうか。

○伊藤校長

ソーシャルディスタンスも取らないといけませんので、考えないといけなことがい

っぱいあって、唯一言えるのは、クロームブックはコードがないということで、そこを何とかうまく生かしたいなと思っています。ただそれと姿勢をうまくリンクさせるのはなかなか難しい話で、学校の文房具では、筆箱が落ちます。同じようにクロームブックも落ちますので、工夫の連続ですね。はっきり言って。

○児玉教育部長

ありがとうございます。

お時間がまいりましたので、意見交換はこの辺りで終了とさせていただきます。

それでは、最後に市長からお願いいたします。

○伊藤市長

今日は委員の皆様、本当にありがとうございました。

私も、久々に学校の授業を拝見することができました。

ICT教育がここまで進んでいるのだなとびっくりいたしました。

伊藤校長先生もありがとうございました。ICT教育に関しては、どんどん前に進んでいくと思っています。

直近では、東京大学工学部の大学院がメタバース大学院まで設置しております。

仮想実現空間を作って、そこにアバターで学生が入って行って、そこで授業を受け、試験を受け、コミュニケーションをとるといったことをしています。

そうすることで進捗状況に応じたクラスが作れるといった話になるようで、そうしたことが義務教育まで波及してくると、これはまたある種の垂直統合の中でいろいろな混乱が生じるのではないかなという気がしております。

そうしたことを踏まえながら、市としても教育長と一緒に良い教育行政を進めてまいりたいと思っています。

本日いただいた意見を参考にしながら、いい予算も作ってまいります。

引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。

今日はありがとうございました。

○児玉教育部長

ありがとうございました。

それでは本日の会議を全て、終了させていただきます。

皆さん、お疲れさまでした。